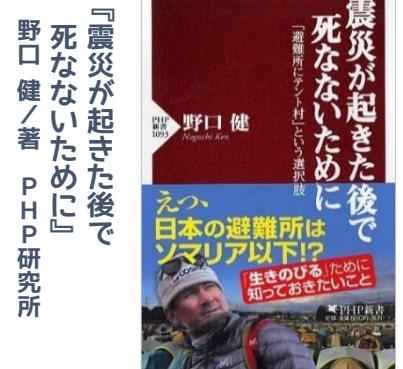


「誰か×誰か」「誰か×何か」の組み合わせが面白い。

ラクガキ × 教科書

『ラクガキ・マスター
描くことが楽しくなる絵のキホン』
奇藤 文平/著 美術出版社

学生の頃、教科書のあちこちにラクガキしていたことを思い出す本書は、なんとラクガキ「の」教科書です。ラクガキなので当然本格的な道具はいりません。必要なものはペンと紙の余白だけです。記号で描く魚、犬の尻尾で描ける樹、表情だけではなく体の動きで感情を表現する人間など、様々なラクガキの描き方が簡単に分かりやすく紹介されています。読むと思わずペンを取りたくなってしまうので、そばに紙を用意して読んでみてください。(生盛)



図書館職員がやってみました！

『震災が起きた後で死がないために』
野口 健/著 PHP研究所
8月30日は「冒険家の日」。これは1965年に同志社大学の遠征隊が世界初となるアマゾン川の源流からのボート下りに成功し、1989年に堀江謙一が小型ヨットで太平洋の単独往復を達成した日にちなんです。

クイズにこたえて、図書館でプレゼントをもらおう。

もんだけ：にやよいのともだち、ペンギンの〇〇さん

① ぎん ② ほん ③ べん

こたえ：

クイズは今月号で終了となります。
今までありがとうございました。



あだち再生館からのおすすめ

「避難所にテント村」という選択肢

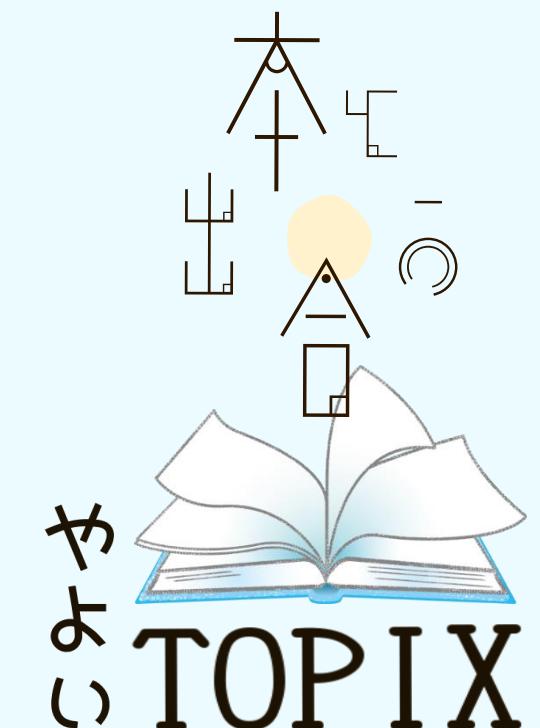
海外からは「難民キャンプ」という大規模なテント村の様子が伝えられます。が、「日本の避難所は、ソマリア難民キャンプにも劣る」と言われたら驚きです。この本は登山家で環境活動家の野口健が熊本地震の際、避難所として日本初のテント村を開設した記録です。多くの支援を背に様々な問題を乗り越え、陸上競技場に150以上のテントを設営・運営し、最後に被災者や運営側からも感謝される活動は私達に「生きのびる」ことや、そのための新たな避難所の選択肢を提案しています。

あだち再生館の図書コーナーに置いておりますので、ぜひどうぞ。

館長が紹介する
「印象に残った1文」とは？



『あだち工場男子』
小早川 真樹/編集 しまや出版



もしかしたら、既にご存知の方もいらっしゃるかもしれません。今回紹介するのは、足立区の中小製造業で働く男性を取材した写真集です。さわやかな笑顔と真剣なまなざしが何かに打ち込んでいる人の姿は、こんなにもかっこいいのか、と改めて教えられる1冊でした。加えて、私と同年代の方や、年下の方たちが真摯に仕事をしている姿を見て、私も背筋が伸びる思いでした。私が住んでいる場所のすぐそばで、今日も彼らが働いている。たったそれだけのことで、こんなにも元気づけられるのが不思議です。(丸山)



「印刷は紙にインキを載せるだけではなく、人の想いに触れられる仕事なんです」

『日本語の冒険』
阿刀田 高/著 角川書店

今日は冒険をテーマとした本を紹介します。本書で冒険するのは「日本語」。いろはカルタやクロスワードパズル、日記等をテーマに日本語を探求していく短編集です。論文や教科書というより、小説の形式などで物語のように読み進められます。普段何気なく使っている言葉に向き合ってみることで見えてくる面白さ。日本語の奥深さを改めて感じてみませんか？(竹原)

記念日から見つける、とっておきの1冊。



こんな本もありますよ

『新版剣岳 点の記』
新田 次郎/原作 文藝春秋

『シャクルトンの大漂流』
ウィリアム・グリル/作 岩波書店



Vol.15



『招き猫百科』
荒川 千尋/文 インプレス